

水泳部 : 部報

著者	志摩, 耕太郎
雑誌名	龍南
巻	2 4 8
ページ	1 3 0 - 1 3 1
発行年	1941-02-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/8455

江畫の清水は汚濁を挾むには餘りにも清い。我は純粹の五高魂を以てボート道に精進することを、こゝに誓ふのである。

終り。

水泳部

理三甲二

志摩耕太郎

幾度筆をとり直しても、生々しい昨夏の敗退が私の腕を痺らせてしまふ。輝かしき龍南水泳部の傳統に未だ會てない敗慘の汚點を印したその無念さが。

古くして彌々新しと豪語する我々が過去の榮光にのみ酔ふのではないが、我が部創設の昔、私の父等は龍南の鉢巻も凜々しく長崎灣十里の遠泳に天晴れ榮冠を戴き、雄々しき河童が呱呱の聲をあげたのであり、續く先人の意氣と熱とは東都に、京洛に、力戰奮闘、よく西海に強豪龍南在りと稱呼せられて來たのである。

然して、我が苦闘史昭和十一年を緋けば、時正に我が帝國が、外に暴虐英大國反擊の機運に奔騰し、内靑少年の体育特に重んぜられ、わけても日本の特技水泳はその頂點に達するの觀があつた。是時龍南の壯氣揚りて止まず、蚪龍寔に飛雲を得たのである。剛毅山川監督を圍み村山主將以下團致一結、よく京洛に戦ひ活躍を劃にし、

勝利の大旗、魚雷大盃を戴きて、全國高校を席巻し盡くしたのである。

輝かしきこの戰蹟を記しつつも、私の耳には先輩が感激の勝鬨が新しく、美しく鳴り響いて居る。さればこそこの傳統を、と思ふにつけて、私は唯々力の足らざりしを嘆くのである。池田監督以下我々は非運に慟くのである。

後輩よ。榮光のどよめきを忘るゝなかれ、高校水上の覇者として全國に君臨せし龍南水泳部の面目は、汝等の奮起によりて益々陸離たらん。しかし拙き汝等の兄が去んぬる夏箱崎松原にて印せる汚名を雪げ、哭ける非運を覆せ。今二千六百一年の帝國が踏み出したる世紀を劃するその巨歩は創業の精神を負ひ、尊き過去の光榮に照りはえて彌々新しい。

我が部も隊伍を整へた。學徒として、水技を錬り、海國日本男兒の本領を發揮すべき準備は完了した。貫徹く傳統をしつかと握りしめ新しき第一步を、さあ踏み出せ。清水を湛へた大プールは汝等を待ち、松籟に鎮まる優勝の碑は汝等の奮闘を見守る。

行けよ。

これを以つて部報にします。

しかして是に、永きに互り常に御高訓、御激勵を忝う

した高津前部長に部員一同の深甚なる感謝を捧げます。

二六〇一、一、四

庭球部

庭球部委員

我等は五高のモットーである質實剛健を、部のモットーとして常に練習に精進し、心身の鍛錬に努めてゐるのである。而して吾等は庭球を通じて何かを獲得しやうと云ふ風に努力してゐる。決して運動のために運動をする、と云ふやうな興味本位に終りたくないと考へてゐる。

今回長き歴史を有する龍南會が、發展的解消を遂げて龍南學徒報國團となり、我庭球部は其一部となつたが、此新体制の下に於ても、吾等は従前の考を更に新にして益々努力せねばならんとの決心を強くするものである。かく考へて昨年の戦績を顧みると次の通りであるが、これではいけない、モットー、吾等は努力して新体制の下、更に一段の練習が必要である、而して白霜原に於て鍛へたる此五高魂を以て大に活躍しやう。

庭球部戦績

四 高校、戦 於 五 高

第一回戦 對佐高 五：〇 勝

決勝戦 對福高 三：二 勝（五高）

五 高 福 高

二 〇 坂 田 六：一 〇 園 本

一 〇 井 上 四：一 六 兒 玉

三 〇 望 月 七：五 山 田

二 〇 白 六：二 三 小 岩 井

一 〇 井 上 一：一 六 兒 玉

インターハイ九州ゾーン 於 九 大

第一回戦 對山口高 三：二 勝

第二回戦 對城大豫科 三：二 勝

準決勝戦 對廣島高 三：二 負

二 〇 坂 田 四：一 六 岡 本

一 〇 望 月 二：一 六 桂 井 上

三 〇 望 月 六：二 武 廣

二 〇 白 四：一 六 岡 本

一 〇 井 上 二：一 六 井 上